

『砂漠の国の柔道場』 『第四話』 柔道が築いたアラブとの信頼（上）

岡本文夫 （元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）



柔道場は、まだ存続していた

本社総務部広報課で4年間勤務した後、二度目のカフジに赴くことになった。

この時の心境には誠に複雑なものがあつた。前回の勤務時期の後半はイラン・イラク紛争が始まっており、時折大きな爆発音が海上を伝わってきて、我々を驚かせた。

再赴任の時期には、紛争は末期的混迷状況に入っており、ガフジの現場にも恐怖を伴う多大なはた迷惑が及ぶようになっていた。

まず、200本の沖合油井から集油して1本の太いパイプラインをポンプアップして陸上タンク群に送油するための大型集油施設（Gathering Station）の周辺までイラン海軍のガンボート群が押し寄せて旋回機銃をバリバリ乱射して、タンカー来航への嫌がらせをした。更には、カフジ港へ入航する大型タンカーが、イラン軍ガンボートからエクゾセミサイル攻撃を受け、船腹に大穴を開けられて辿りついた。不幸中の幸いで、原油積み込み前の空船だったから爆沈を免れたのだが。

一方、両軍どちらの物かは不明な機雷がカフジ港の狭い入り江に漂着した。駐屯するコーストガードがこれの処理に当たったが、拙劣な対応であつたために、将校と兵士各1名が、離れて環視する従業員の目の前で高く吹き上げられて爆死した。

すでに疲れ果てていた Shipping 前任者の交代時期に当たっていたが、本来の後任序

列にいた男が、某精製元売り会社の会長の息子ということで、巧みに危地への赴任指名を回避して、お鉢が筆者に回ってきた。そんなに危険が差し迫った現場に家族を帯同するつもりはない。子供達は小学校6年生と4年生でもあり、教育上の問題もあった。

幸せな家族生活に別れを告げ、単身で危地に赴くのは、まさに断腸の思いだった。

筆者が本社に帰任した後は、柔道場は閉鎖されたものだとばかり推察していた。酷暑の風土の中で諸事無理をしない民族性からして、強い意思を以って柔道指導に当たる指導者なしには、道場は存続できない筈だ。ところが嬉しいことに、まだ道場は存続していたのだ。筆者が読み誤っていたのは、洋の東西を問わず、子供を強く逞しく育てたいという親心だった。大人の部の熱心な弟子たちが、自分たちの子弟を鍛えるために、往時に比べると細々ではあるが、道場を維持運営してくれていた。その中心となって貢献してくれていたのは、ザハラくんという役員室のシニア・セクレタリーだったが、彼は元々ボディビル・クラブを主催しており、柔道を通じて心身を鍛える活動に深い理解が出来ている男だった。4年間のブランクの間に、彼らなりの解釈が加わったものか、少々変な柔道になっていたものの、大外刈りから袈裟固めに移行する連続技は間違いなく筆者の指導によるものだった。再赴任の日から、筆者は唯一無二の師範として指導に当たることになったが、どれ程柔道が単身赴任の無聊を慰めてくれたか解らなかった。

Shippingの責任者として、前回赴任時より仕事が多忙を極めていたので、週1回しか稽古に時間は割けなかったが、二度目の在任中には60名のアラブの青少年に指導することが出来た。稽古日は毎週土曜日とした。現地の週末（ヒジュラ歴）は木金であり、土曜日が働き始めになる。木金で緩んだ精神を引き締めるために、土曜日に厳しく稽古して汗をかくことにした訳だ。

再赴任後間もなく、『Okamotoが戻って来たぞ！』という情報が広まったと見えて、カフジ中学校の生徒7名が纏まって入門してきて、道場は賑やかになった。

彼等の言う事には、エジプト人の体育教師が柔道の有段者であり、連れて来ても良いかとのことで、筆者は大歓迎する思いがした。中学には道場はないらしいから、体育の授業に柔道をパッチワークして、我が道場で指導しても良いではないか。もしくは、柔道部を作らせて、部員を集団入門させても良い。

生徒たちに引っ張られる様子で、エジプト人教師は道場に顔を出した。着ていた柔道着のくたびれ具合から察して、間違いなく柔道の経験者だろう。しかし、白帯を締めている様子に自信のなさが現れていた。「さあ、やるか！」との声掛けに対しては、「ちょっとだけ、お願いします」との気弱な返事。これは偽物だと直ぐに分った。

生徒たちからは、声援というよりは野次が飛ぶ。アラビア語の意味はサッパリ解らないが、「先生！その日本人なんか、やっちゃえ！やっちゃえ！」と言っているようだ。乱取りは一方的に進行して、反撃は全く出ない。右からは『払い腰』、左からは極め技

の『袖釣り込み腰』で、二回ずつ投げ飛ばしたところで、ギブアップが入った。

日頃、生徒たちに大言壮語してきた手前、引っ込みがつかなくなり、顔出ししなくてはならなかったのだろう。生徒たちも生徒たちだ。高段者の実技を見て勉強しようとの真面目な発想ではなく、あたかも山で採ってきたカブトムシ 2 匹を喧嘩させて楽しもうという悪ガキ的思考で、筆者と体育教師の対決を楽しんだという図式だった。

面目丸潰れの教師には、僻地への柔道普及などという高邁な考えは全くないから、筆者の道場とのコラボなどという話には全く乗ってこなかった。むしろ、就職時に提出した経歴書が段位詐称の虚偽記載だったことが発覚して、クビになりはせぬかとの心配の方が先だったのではなかろうか。

カイロには証明書偽造を専門とする代書屋がいることは衆知の事実だ。段位証明書でもカイロ大学卒業証明証でも金さえ払えば簡単に入手可能。これが偽造だと非難されることがあっても、劣悪な図々しさがあれば、すっとぼけて切り抜けることが可能なことは顕著な例が証明しているではないか。

この項では、柔道活動を通じて現地社会との間で培った信頼関係が、ひょっとすると軋轢に発展しかねなかったピンチから救われたエピソードを紹介しておこう。

再赴任して間もなく、部下がカフジ港駐屯のコーストガードの司令官・アワード中佐の呼び出しを伝えてきた。

「オー！ ミスター岡本。また来たか（笑）」、

一回目の赴任中、彼との間には奇妙な交流があった。禁止事項であるという夜の漁労であったが、『アラビア湾の漁労長』と異名をとる筆者は、趣味と実益を兼ねて、この禁令を無視。コーストガードには 5 回の逮捕歴があった。普通ならば一度でも恐怖体験したら、もう二度とやらないだろうに。しかし、悪いことをしている自覚が全くない筆者は家族と友人に美味しい物を食べさせるために漁労を止めることはなかった。

『変わった日本人もいるもんだ』と、少佐（当時）は興味を感じてくれたようだ。

加えて、『柔道を教えている日本人って、コイツか？』と、興味を深めたのではないか。

筆者の道場には、カターニというコーストガード中尉が一度入門しそうになった。

入門書にサインしたのだが、武威を誇っているべき軍人が、その他の弟子の目の前でポンポン投げられている訳には行かないと判断したのだろう。結局、稽古にはこなかったが、駐屯事務所に帰ってからアラブ流の大げさな表現で道場の活況を伝えたに違いない。

再会を喜ぶとともに、中佐は奇妙な質問をした。

「日本のあるマガジンに、誰かが本官のことを書いたらしい。あれはミスター岡本の仕業ではないかと考えているのだが、どうだ？」「ハア！？（哑然）」。

突拍子もない質問に戸惑ったが、暫く考えて思い当たった。

「アー、あれのことですか！ ハハハ」

筆者は、一回目の赴任を終えた後、本社広報課長代理として帰任した。広範な担当業務の中に広報誌の編集長も含まれていた。編集企画に知恵を絞ったひとつに、巻頭

言の充実があった。アラビア石油らしい論述たるために、日本とアラブの社会文化比較論を連載したのだが、ある号ではアワード少佐（当時）の謹厳実直を貫く軍人ぶりを紹介した。

イラン・イラク紛争が勃発してアラビア湾に緊張が走り、カフジでも原油開発及び出荷の海上任務以外には終日とも海に入ってはいけないという政府命令が下った。

冗談ではない！新鮮な魚など入手できない環境下、自分で漁労するしかないではないか。開戦半年後の一時的緊張緩和を見て、我々の強い要望に妥協した司令官は、条件付きではあったが、禁漁を緩和してくれた。いわば半年間の休漁期をおいていた後だから、出漁再開日は記録的な豊漁に恵まれて、大アジ、フエフキダイ、ハタ等々の魚果によって 50 リットル入りの大型クーラーがいっぱいになった。意気揚々と港に戻った筆者を待ち構えていた兵士は、事務所の冷凍室へ連行して、獲物を全て没収した。兵卒クラスに英語は通じないし、軽機関銃を肩から下げていて抵抗も出来ない。

『憶えてやがれ、この野郎！』。

翌朝一番の抗議に対して、アワードは前日にシフトに入っていた兵士 3 名を呼びつけて、厳しく詰問。震え上がった兵士たちを前に、筆者に質問した。

「魚を取りあげた兵士はどいつだ？」。指差した兵士はますます震え上がった。

冷凍室では、「ちゃんと数を確かめてくれ。もし、少なくなっているようなら、本官はコイツを処罰しなければならない」「いやいや、十分だ。取り戻せば良いので、そんなに兵士を苛めんでもよろしい」「いや！本官の処分に口を出すな。命令を順守しない兵士は処罰の対象だ！」。

自陣営を庇うことなく、非理曲直を明確にする態度に、サウジ軍人の真髓を見た感じがした。

・・・という経緯と敬意を文章にした旨を説明したところ、是非英訳して提出して欲しいとの要望であった。お安い御用ではないか。翌日、英訳を届けたところ、大変喜んでくれて、間違いなく日本人として初めて彼の自宅への招待を受ける光栄に預かった。彼の書斎で驚かされたのは、片側の壁全体の書棚が各種の書物でギッシリと埋まっていたことだ。これは、彼が単なる武威を誇る軍人ではなく、かなりの教養人であることを示している。軍人としての訓練を受けたパキスタン海軍時代の軍事関係書籍に始まって、小説や海外観光案内までが整然と並んでいた。悪戯っ気溢れる筆者が 3 冊ばかり手に取ってページを開いて見ると、恐れ入ったことに書き込みや赤線を引いてあって、本棚の書籍が虚栄心からくる飾り物ではないことが解った。

ここまでのエピソードはあくまでも、話の枕であり、これからが本論なのだ。

筆者の疑問は、日本で発行する広報誌のある号の巻頭言の存在を、何故中佐が知っていたのかということだった。「イヤ、ナニ。ある友人が教えてくれたものでね」。コーストガードの司令官に、そのような対話出来る日本人従業員はいない。

筆者の洞察力は、中佐が抱いた深い興味と筆者との間の奇妙な友情の結果、サウジの体制側のある機密に触れてしまっていることに気が付いた。

第一話で既述したように、サウジ当局によって我々外国人は反政府、反モスレムの言動がないか否か日々見張られていた。日本人の有力管理職の部下には秘密警察のエージェントがそ知らぬ顔して配属されている。日本の家族からの手紙は時々紛失する。（筆者は、妻に手紙には通し番号を打つように指示していた。こうすれば、間引かれた場合、直ぐに分るからだ。）

日本から送られてくる雑誌や週刊誌の類は、ヌード写真や酒の広告のページは必ず破かれていたが、こちらでも時々当局による間引きが行われており、発注者のもとに愛読雑誌が届かない事例が時々発生する。間引きの対象のひとつにアラビア石油の広報誌があった訳だ。監視担当者は、注目に値する記述を発見し、コーストガード司令官に報告。アワード中佐は、筆者の再赴任を知って直ちに確認したという流れだった。

前回の基地勤務時代の、何回逮捕されても夜の漁労を止めない変わった日本人であり、柔道指導に当たる稀有な存在に好意的興味を抱いてくれていた司令官は、防諜目的で上がってきた記事報告をむしろ好意的に受け止めてくれていたということだろう。

因みに、上記の手紙や書籍のチェック以上に最も効果的な外国人監視は電話の盗聴である。これらの作業は、サウジ政府と韓国政府（or エージェント）との間の秘密契約において実施されていると推察されるのだが、次項では我々が監視されていた実態への観察について記述しておきたい。



なかなかサマになっている『体落とし』



おかもと・ふみお

1947 年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013 年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」(財界研究所刊)を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段 (クウェート国柔道連盟七段)。

To be continued